

🌿 京都のステイプ先生

宮川美佐子

ステイプ先生が、佐々木徹先生の紹介で京都大学に着任されたのは1997年4月だった。わずか半年間の客員教授だったが、コンラッドに関してのみならず、研究を続けるうえで大事なことをたくさん教えていただいた。私は三年の博士課程を終えて京大の研修員（京大独自の制度とのことで、授業に出たり図書館を利用したりできる、当時は大変有難い制度だった。今どうなっているのかは知らないが）になったばかりで、ステイプ先生の授業に後輩たちと出席することができた。

初めてお会いした時、*Cambridge Companion* を編集したコンラッドの偉い専門家が来るということで、人づきあいの苦手な私は期待と同じくらい不安も抱えていた。しかし、ステイプ先生は長身を前に傾けるようにしてにこやかに優しく話しかけてくださり、心配はすぐに消え去ってしまった。ところが、安心するのは早かったのである。ステイプ先生は学問には非常に厳しかった。求める基準は高く、学生に冷たい態度を取ることこそないが、こちらが的外れなことを言えばあるいは白けた顔になり、あるいは笑いながら混ぜ返す。著名な学者にも手厳しい批判を次々に加える。私自身が実はひそかに疑問を抱いていた批評家をステイプ先生が切って捨てた時は内心妙に嬉しかったが、その鋭さは自分にも向くのだと思うと身の引き締まる思いがした。だから、当時書いていた *Lord Jim* の論文を褒めていただいたのは（お世辞分も多いだろうけど）とても嬉しかった。

授業は3年生から大学院生までが混在したクラスで、受講生は15名ほどだったろうか。コンラッドの“An Outpost of Progress”と“Heart of Darkness”、フォースターの“The Machine Stops”、ウルフの“The Mark on the Wall”を読んだ。学部生が“Outpost”の登場人物に同情する、と言うと先生はふっと笑うのだった。怖かった。Kurtz という天才の転落を語ろうとする学生には、「あれはただの暴力的な差別主義者の化けの皮が剥げただけだ。美化すべき人物ではない」とおっしゃった。モダニズムと言ってもジョイスにはそれほどこだわりがなかったようで、*Finnegans Wake* の日本語訳があると聞くと“I’m waiting for the English translation”とおっしゃった。テキストに密着し、形容詞や冠詞のわずかな違いで生じる意味にも注意を払い

(たとえば“**Heart of Darkness**”になぜ **the** がついていない方が良いかなどの議論もあった)、精緻な読みを示してくださった。佐々木先生のお宅で余っていたという婦人用自転車で通勤し、金髪で颯爽としたステイブ先生(田中賢司先生が「ロード・ジムがそのまま年を重ねたよう」と評していた)が「ママチャリ」に乗っているのはあまりにミスマッチだと噂になっていた。夏休みに入る頃、ステイブ先生、当時院生だった廣田園子さん、私の三人で嵐山に行ったのも楽しい思い出である。肉を食べない先生は湯豆腐を楽しみ、天龍寺では借景という工夫を美しいと言って感心していた。

ステイブ先生のご着任は現在のコンラッド協会の前身でもある東京コンラッドグループの先生方との出会いにもつながった。月一回の勉強会は密度の濃いものだった。勉強会の日は皆で御蔭通りのフランス料理店「ベルクール」を訪れた。リーズナブルに本格的な料理が食べられ、赤いひさしのたたずまいも本場の店のようだった。日本人の給仕さんがフランス語を話すことに気づいてステイブ先生は喜び、フランス語で楽しく会話していた。

こうしてステイブ先生について書かせていただく機会を得ると、最近では先月のことも忘れていくのにあの頃の記憶がしっかり残っているのに自分でも驚く。長く闘病されたと聞いているが、まだそれほどのお年ではなかったのにとするととても残念である。あの頃一緒に授業を受けた学生は、大学の研究者になったり、教職に就いたり、その後音信不通になってしまった人もいる。同じ研究者であっても、顔を合わせるのは数年に一度だ。「ベルクール」も最近閉店したらしい。しかし今も思い起こすと、あの頃の学生たちに交じってキャンパスの若葉の下を婦人用自転車で駆けるステイブ先生の姿が鮮やかに見えるような気がする。

(みやかわ みさこ 福岡女子大学 教授)